vol.13　リディアンスケールの使い方について　～その 4～

では、vol.13、始めていきましょう。

引き続き『リディアン的なコード進行』についてやっていきます。

まずは、前回まとめた事の確認ですが、一覧にするとこの様になっていましたね。

※F リディアンモードでのダイアトニックコードの使用感(4 和音)
※青字はリディアンの特性音♯4th を含むコード
Ⅰ、FM7　　tonic
Ⅱ、G7　　△　(※トライアドなら○)
Ⅲ、Am7　　?
♯Ⅳ、Bm7(♭5)　✖
Ⅴ、CM7　　△
Ⅵ、Dm7　　?
Ⅶ、Em7　　◎

もしかしたら△の記号からは、「使わない方が良い」と言った印象を受けるかもしれませんが、あくまで「リディアン・モードの響きから離れやすい」と言う意味なので、絶対に使ってはいけないわけではありません。

ただ、✖(バツ)印の Xm7(♭5)に関しては、楽曲(もしくは特定の範囲)をモーダルな状態(狙っているモーダル・ハーモニーの状態)に保ちたいのであれば、使わない方が良いでしょう。

と、言う事で、今回は、残りのコードを見ていきましょうか。

まずは、FM7 から見るとⅢ m7 にあたる Am7 ですが、このコードは構成にリディアンの特性音である♯4th(今の例だと B 音)を含まず、他のモード等に強く傾く様な響きを持っていないので、ある程度は自由に使っていい、とされています。

ただ、C キーのリラティブマイナーである Am キーのトニックなので、あまり使い過ぎると、Am キー的な響きが出てきてしまうのでそこは注意します。

同じ様に、Ⅵ m7 にあたる Dm7 も、リディアンの特性音を含まず、他のモードに強く寄る響きを持っていないので OK と。

ですがこちらは、使いすぎると D ドリアンに寄ってくるので、そこに注意します。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

一覧にまとめるとこんな感じになりますね。

※F リディアンモードでのダイアトニックコードの使用感(4 和音)
※青字はリディアンの特性音♯4th を含むコード
Ⅰ、FM7　　tonic
Ⅱ、G7　　△　(※トライアドなら○)
Ⅲ、Am7　　○
♯Ⅳ、Bm7(♭5)　✖
Ⅴ、CM7　　△
Ⅵ、Dm7　　○
Ⅶ、Em7　　◎

おそらく、ここで思うであろうことは、なぜ Dm7 だとドリアンに寄る可能性があるのに、Em7 ではフリジアンを心配しなくても良いのか？と言う事でしょう。

これに関しては、まだ詳しくは解説していませんが、F リディアンの特性音(♯4th)と、D ドリアンの特性音(M6th)が、リラティブ(相対、音構成的に平行)な関係性で見ると、同じ音になるからですね。

・F リディアンの構成と特性音
F(tonic)、G(M2nd)、A(M3rd)、B(♯4th)、C(P5th)、D(M6th)、E(M7th)

・D ドリアンの構成と特性音
D(tonic)、E(M2nd)、F(m3rd)、G(P4th)、A(P5th)、B(M6th)、C(m7th)

なので Dm7 を使いすぎると、このコードがトニック的に聴こえてきて、響きがドリアンに寄ってくる、と。

特性音が両者とも同じ B 音なので、コードの影響力が強く出るのですね。

これに対して、E フリジアンは特性音が m2nd なので、Em7 を弾いても、そこまで強くリディアンに干渉してこないわけです。

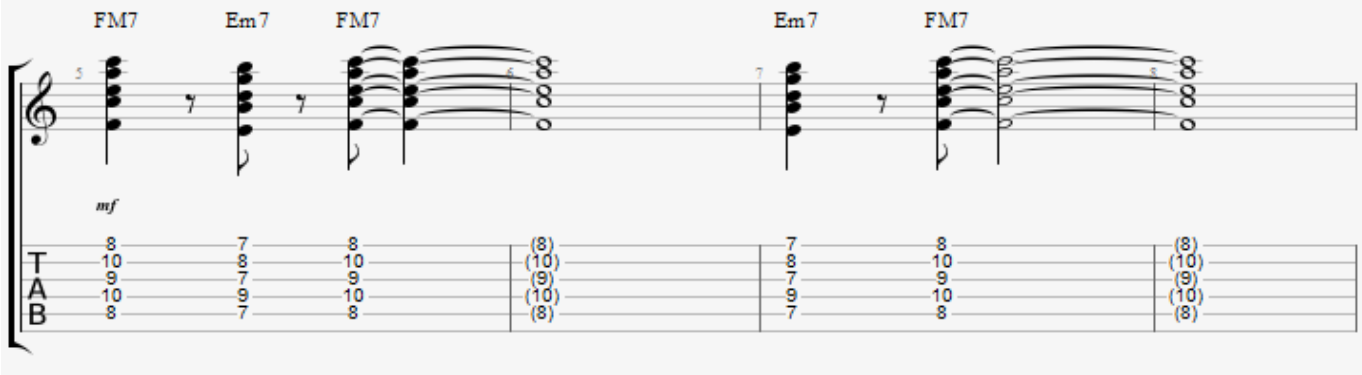
・E フリジアンの構成と特性音
E(tonic)、F(m2nd)、G(m3rd)、A(P4th)、B(P5th)、C(m6th)、D(m7th)

とは言え、Em7 自体は、E フリジアン・モードのトニックなので、フリジアン的な進行を作れば、フリジアンの響きが出てきますが。

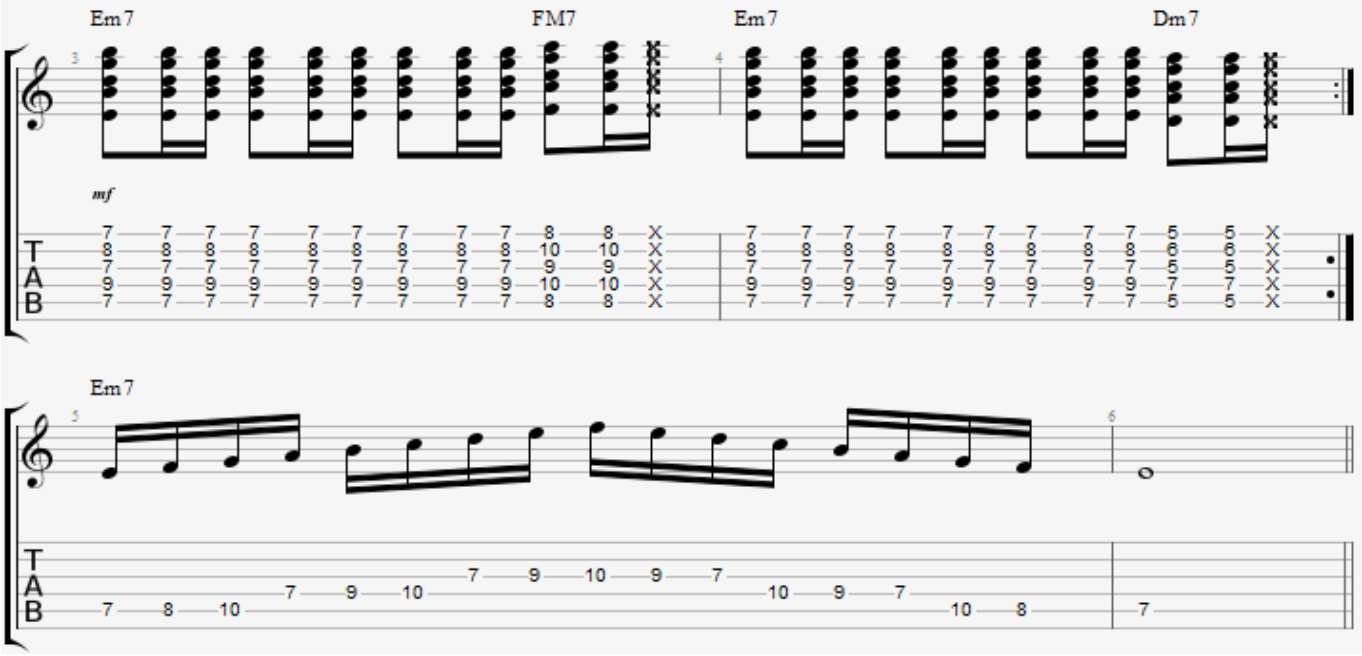
例えば、vol.10 で出てきた以下の譜例を、大体同じ様なコードを使ってフリジアン的にするとこんな感じだったりします。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

・vol.10 で出てきたリディアン的な進行



・E フリジアン・モード的な進行(※下の 2 小節は E フリジアンスケール)



この様に、全く同じ(スケールの)音構成とコード群を使っても、どのコード(音)をトニック的に使うかによって、全体の響きが変わってくることが分かると思います。

では、4 和音の役割を一通りまとめた所で、次はトライアドを見てみましょう。

と言っても、機能としては 4 和音の時と大体同じですが。

※F リディアンモードでのダイアトニックコードの使用感(トライアド)
※青字はリディアンの特性音♯4th を含むコード

Ⅰ、F　　tonic
Ⅱ、G　　◎
Ⅲ、Am　　○

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

♯Ⅳ、Bm(♭5)　✖
Ⅴ、C　　〇
Ⅵ、Dm　　〇
Ⅶ、Em　　◎

さて、見ての通り、縛りが緩くなりましたね。G7 は「トライアドなら〇」としていましたが、G(II)のコードは、本当は Em と同じくらい、リディアンでは使いやすいコードです。

これには理由があって、モード的なコード進行は、ダイアトニックコードを横に並べてみた場合、隣り合ったコードへ進行する事が推奨されています。

これは要するに、先の一覧を横にして、特定のコードから左右のコードに進行するようにしたらいいわけですね。(※Xm7(♭5)以外で)

F(T)　⇔　G(◎)　⇔　Am(〇)【Bm(♭5)(✖)】C(〇)　⇔　Dm(〇)　⇔　Em(◎)　⇔　(F)

そして、モーダルなコード進行では、『そのモードの特性音を含み、トニックコードに近いコード程、トニックへの解決を促すコード』とされています。

上の横に並べた一覧で言うと、F リディアンの特性音(B 音)を含む青字のコードで、かつトニックである「F or FM7」に近いコードが、リディアン的な解決を促す、とそういう事です。

なので、FM7 に解決するコードとして一番強力なのは「Em(Em7)」となり、次点で「G」になるわけです。(※G7 がここに入らない(入りにくい)のは前回の話の通りです)

実際に前のページに載せた譜例は、隣り合ったコードにしか進んで(もしくは戻って)いませんね。

これをトニックに設定したコードを中心にやる、と。(※例えば今は F リディアンの話なので FM7 を中心に進行を作る)

さて、長々と解説してきましたが、この辺りで、モーダルなコード進行についてポイントをまとめておきましょう。

1、狙っているモード・スケールのトニックがルートになっているコードをトニックコードとする。(※例えば F リディアンなら FM7、D ドリアンなら Dm7)

2、そのモードの特性音を含むコードが、主にトニックへの解決を促すコードである。(※例えばリディアンなら♯4th、ドリアンなら M6th)

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

3、そのモードの特性音を含むコードでも、他のモードや調性を示唆するコードは使い方に気を付ける。

4、構成が「Xm7(♭5)」になるコードは使用を避ける。

5、そのモードの特性音を含み、かつトニックコードに(音程的に)近いコードほど、トニックへの解決を促す。(※F リディアンならば Em7 が一番近い)

6、モードの進行では、隣り合ったコードへの進行が推奨される。(※F リディアンの場合は、FM7→Em7→FM7、F→G→Am→G→F など)

と、こんな感じですね。

正直、情報量としてはかなりのものになっているので、何度も読み返してゆっくり覚えていってください。

今はリディアンの話ですが、結局、どのモードを使う時も、上の 6 項目を考える事になるので、ルールとしては(大方)これが全てです。

後、これらの項目を守ると、実はコード進行のパターン(使うコードのパターン)が大体決まって来るので、全体としては驚くほどの知識量ではありません。

今後、モード奏法の勉強を続けていくにあたって、「これ、前も似たようなの見たな」と思う事が増えてくると思いますので、焦らずに行きましょう。

では、今回は以上になります。

このテキストの実践としては、試しに、先ほどの 6 つの項目に則って自分なりに進行を作ってみましょう。

4 和音とトライアドの場合、どの様に聴いた感じが変わるのか？や、F リディアン的なトニックへの解決を感じられるか？等、音を良く聴きながら、モードの響きに慣れていって下さい。

次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved